



帯島 1



三厩から先にも、兜岩・鎧島・帯島と、龍飛に至るあちらこちらに義経の伝説があります。そのひとつ、龍飛の帯島は、義経が帯を締めなおしたところというが、地名のいわれです。

ここで義経はアイヌの酋長から巻物をもらい、この巻物に記されていることをもとに北海道に渡ったといえます。

宇鉄遺跡

本州最北端の弥生・続縄文の遺跡といわれています。弥生時代の遺物では、32基発見された墓のひとつから1個の翡翠(ひすい)製の丸玉と、350個余りの碧玉(へきぎょく)製管玉(くだたま)が発見されたことが注目されます。一方、北海道南部の続縄文時代との関係も、出土した土器からうかがうことができます。人々は、弥生時代とは違う人びとがこの親音に海の安全を祈願してきました。この寺に『奥州津軽合甫外浜三厩 龍馬山観世音縁起』という版木が残っています。

松陰道入り口 3

嘉永5年3月5日(1852年4月23日)、吉田松陰は、日本海側の小泊から算用師(さんようし)峠を越えて三厩算用師に至り、ここから陸奥湾沿いに外ヶ浜を南下して平館の台場を訪れました。津軽海峡に姿を見せるようになった異国船を観察するためです。このとき、松陰23歳。三厩から平館の台場まで松前街道を歩きました。

佐渡菓子店の「はなつまみ」 4



「はなつまみ」は「うばたま」の方言。三厩・今別・蟹田の菓子屋でよく見かける、ごく普通の菓子でしたが、近年過疎が進んで菓子屋が減り珍しくなりました。三厩中浜の佐渡菓子店は、数少なくなった「うばたま」を作る店です。初代が函館から大火の後移住、2代目が青森の「青柳」で修行しました。昆布羊羹も名物です。(佐渡菓子店・三厩中浜)

義経寺 5

龍馬山義経寺は津軽三十三観音の19番札所で、神仏分離の以前は「観音堂」といいました。その当時は真言宗に属していましたが、今は浄土宗の寺となっています。海峡を往き交う人びとがこの親音に海の安全を祈願してきました。この寺に『奥州津軽合甫外浜三厩 龍馬山観世音縁起』という版木が残っています。北へ逃げてきた義経が波の静まるよう祈願した場所で、のちに円空がこの故事に倣って仏像を彫ったと記されています。境内には、地元の前主や越前・松前などの商人(あきんど)が寄進した石灯笼や石碑が多数見られます。

義経寺の円空仏(木彫観世音菩薩像) 5

両肩に掛かった衣が両肘の辺りでへこみを作り出している点などが、海峡を挟んだ北海道福島町の吉野教会にある観音菩薩坐像と同じです。福島町の像を刻んだ直

（松前街道）
中世の外ヶ浜には内真部(うちまんべ)・潮潟・油川堤などの湊があつて、街道を通じて安藤氏や北畠氏を支えていました。近世になると、北前の弁財船が登場して、船も大型化します。近世の外ヶ浜には、弁財船の出入りする湊に、蟹田・油川・青森がありました。また、三厩(みんまや)・今別など津軽海峡を行き来する船が入りする湊もありました。松前街道は、油川から北の湊や町を行く街道で、奥州街道として扱われることもあります。

津軽海峡を挟んで、北海道の渡島檜山地方と津軽半島とは、古(いにしえ)より交流の盛んな地域でした。津軽半島の最も北に開かれた湊・三厩は、松前へ向かう北前船が風を待つ浦です。外ヶ浜の煎海風(いりこ)・真昆布・乾貝柱・乾鮑を積み出しました。今別は蟹田と並ぶ二浦で、津軽の九浦のひとつ。これも北前船の風待ち湊です。海峡の荒波で育った真昆布や、津軽半島のヒバを積み出していました。蟹田も津軽九浦のひとつで、ヒバを積み出していました。

津軽海峡を挟んで、北海道の渡島檜山地方と津軽半島とは、古(いにしえ)より交流の盛んな地域でした。津軽半島の最も北に開かれた湊・三厩は、松前へ向かう北前船が風を待つ浦です。外ヶ浜の煎海風(いりこ)・真昆布・乾貝柱・乾鮑を積み出しました。今別は蟹田と並ぶ二浦で、津軽の九浦のひとつ。これも北前船の風待ち湊です。海峡の荒波で育った真昆布や、津軽半島のヒバを積み出していました。蟹田も津軽九浦のひとつで、ヒバを積み出していました。

後に海峡を渡って津軽半島に至り、この像を造ったものと考えられます。像の背面に「寛文7年夏」の銘文が書かれているものの、円空が書いたものかどうか、年代が確かなものかどうか、わかっていません。(青森県文化財保護課のHPを参照)秘漁ですから、円空仏は開帳のとき以外は拝観できません。

厩石 6



三厩の湊近くにある岩で、埋め立てられる前は波打ち際にあり、浸食されて3つの大きな穴があいています。義経はここから馬に乗って津軽海峡を渡り北海道へ向かったという伝承があり、このとき馬をこの岩屋に繋いだというので、三厩という地名のいわれになっています。油川から三厩へ至る松前街道はここが終点で、その先は船で海を渡りました。

三厩本陣 7

松前藩主である松前家や、蝦夷島へ往來する幕府役人の、三厩における本陣は松前屋でした。松前屋山田家は、蝦夷島の松前などを相手にする廻船問屋で、名主などの村役人を勤めました。享保年間(1716～36)には、江戸の材木商飛騨屋と連携し、蝦夷地の木材採探を請け負っています(『福島町史』第二巻)。山田家の関係文書は、青森県立郷土館と青森県立図書館にあります。本陣や廻船問屋の活動に関する史料が多く、津軽と蝦夷島との交流を示す貴重な史料となっています。

本覚寺の庫裏 8

慶安4年(1651)に良信安長上人が開いた、津軽半島で最も古い寺です。享保3年(1718)に貞伝上人が5世住職となって、その事績により大いに栄えました。現在の庫裏は、明治末から大正時代にかけて、大泊(おおどまり)の檀家が小樽へ移住する際に寄進したものです。この檀家は、もともと網元で、小樽に移住後に練御殿を建てました。今別と北海道の間に、密接なつながりのあったことがわかります。庫裏の見学は事前に連絡が必要です。

本覚寺の青銅塔婆 8



享保12年(1727)、5世住職・貞伝上人が、秋田・松前から喜捨を集めて作った、念仏名号塔です。本荘の鑄物師小原安兵衛を招聘して作せたと云います。貞伝上人は、元禄3年(1690)に

生まれ、享保元年に本覚寺の住職となって、寺を再興しました。多くの仏像を造り、蝦夷島を布教に歩いています。昆布の養殖に尽力し、漁村の生活を支えたため、広く慕われました。

青銅の塔婆は古い銅の器を募めて造りました。塔婆を造った残りで、1寸2分の小さな阿弥陀像を1万體こしらえました。修行した誓願寺の本堂を再建するため浄財を募り、これに応じて喜捨を行なった信者に万體仏を手渡したといえます。この万體仏は、本覚寺に2体残るのをはじめ、小泊や松前・福島などに残されています。漁師や船乗りが海難除けや豊漁のお護りにしてきました。伝承によれば、享保16年、貞伝上人は青銅の塔婆の下で即身成仏として入寂しました。

与茂内浜 9

18世紀前半に、貞伝上人が、海中に岩を投じて昆布を養殖し、魚を寄り付けせることを教えた、と伝えられています。今別昆布は「废物」として、今別の湊から北前船で運ばれました。かつての与茂内の浜は「昆布浜」と呼ばれ、その昆布は長崎俵物として上海へも運ばれていました。

松陰くぐり 10



松前街道は、褒月(ほろつき)と山崎の間は、波の打ち寄せる浜伝いを歩きます。「白犬くぐり」「黒犬くぐり」という岩の穴を通る場所もありました。現在、地元では「いんくぐり」と呼んでいます。

幕末に吉田松陰がここを通ったことから「松陰くぐり」ともいいます。

鬼穴 11

今別町大泊の海岸には、奇岩奇石におおわれた岩場が多く、その中に「鬼の穴」といわれる洞窟があります。その昔、この岩穴に住みついた鬼が海を通る船や田畑を荒らすので、村人たちは困り果てていた。そこへ、蝦夷へ向かっていた義経一行が通りかかり、鬼を退治したという伝説があります。

大泊 12

算用子から平館に至る間、松陰は津軽海峡を見えています。黒船の來往する津軽海峡を見ることが、この旅の目的でした。『東北遊日記』に、松陰の津軽海峡への思いが記されています。その一節が石碑に刻まれています。

「小泊、三厩の間、海面に斗出するものを竜飛崎と為す、松前の白神島と相距ること三里のみ。而れども夷船憧々として其の間を往來す。これを楊側他人の酣睡を容するものに比ぶれば更に甚だしと為す。苟も土氣ある者は誰れか之が為に切齒せざらんや。独り怪しむ、当路者漠然として省みざるを」

赤根沢の赤岩 13

第2酸化鉄で出来た赤土、つまり弁柄(べんがら)で、弘前藩が領内の寺社の赤い塗料に用いました。百澤寺(岩木山神社)の堂や山門などの修復に使われました。貞享3年(1686)に赤土を公儀へ献上、享保12年(1727)には日光山に献上した記録が『津軽一統志』にあります。日光東照宮の塗料に使われました。採掘の跡は今も洞窟となって残っています。

松前街道並木道 14

平館台場跡付近には、およそ1キロにわたって黒松並木が続いています。弘前藩主の4代津軽信政が植樹させたものだと言われています。松前街道の松並木が、ここにもっともよく当時の面影を残しています。

平館台場跡 15

19世紀になると、津軽海峡に異国の船が姿を見せるようになりました。嘉永元年(1848)、江戸幕府は弘前藩に命じて、平館に西洋式の砲台を築かせました。嘉永5年3月6日(1852年4月24日)、幕末の志士・吉田松陰(1830～59)もこの台場を訪れています。松陰は、ここから松並木の街道を平館の湊まで歩き、漁師の船に乗せてもらって、青森の湊に入りました。

福昌寺の円空仏(観音菩薩坐像) 16

津軽半島の外ヶ浜伝いに残っている円空仏に共通する特徴があり、背面に何か書かれた痕跡があります。また、手垢にまみれて黒光りする箇所があり、広く地元の人びとに親しまれてきたことがわかります。円空仏の拝観には事前申し込みが必要です。

平館神社の松 17



才の神の松 18



野田玉川の松 19



大平山元遺跡 20

土器に付着した炭化物が16000年前で、世界最古の土器が出土しています。日本の新石器時代の始まりが、これまで考えられてきた時期(12000年前～10000年前)より、遥かに遡ることになりました。土器に文様はなく(無紋土器)、内側に炭化物が付着していることから、食べものの煮炊きに使っていたと思われます。また、日本で最も古い土鐵も出土しました。石器や土器は、大山小学校の跡の大山ふるさと資料館に保存されており、自由に見学できます。

史跡松前街道 21

蟹田の町より少し北の街道に、むかしの古道がわずかに残っており、史跡になっています。街道は「松前街道」とも「外ヶ浜街道」とも呼ばれました。

蟹田川 22

蟹田は、扁柏(ひば)を積み出す北前船の湊でした。砂鉄を産する浜もあったことから、製鉄も盛んで、造船も行なわれていました。蟹田川は今日より水嵩が多く、伐り

出した扁柏を筏に組んで流していました。下流の小国(おくくに)に川湊があり、ここで小廻し船に積み替えました。江戸時代には製鉄も、この辺りで行なわれていました。

津軽半島を南北に走る中山山地は、下北半島と並ぶ扁柏の産地で、日本三大美林のひとつに数えられています。山脈の西側で伐り出された扁柏は岩木川の船運を使って鮎ヶ沢から積み出されますが、外ヶ浜の材木を積み出したのは蟹田の湊です。

また、雑木の森では白炭(しろずみ)を焼いていました。白炭は安定した高温となるので、鉄を鑄造かすのに適しています。砂鉄があり、白炭があるので、製鉄が盛んでした。タタラ職人をはじめ、蟹田にはさまざまな職人や人足が集まってきました。船大工も多く、造船が行なわれていました。ここ蟹田では大坂鴻池の千石船を存えていました。

鍛冶屋の一本松 23

かつてこの周囲が低湿地の「湯」であったころ、千石船がこの松に錨綱(ともづな)を繋いだといえます。もともと「松田の鍛冶屋」のものだったことから、「鍛冶屋の一本松」と呼ばれていました。蟹田の湊には、鍛冶屋をはじめ、鉄に関わる職人が数多くいました。高岡(のちの弘前)の地に城を築くとき、城門に打った鉄も、蟹田で作られました。下北半島からも職人を呼び寄せ、蟹田で製鉄したといえます。

玉松台 24

黒松が並ぶこの丘の最も古い老松は樹齢300年と推定されます。松は加賀・越中・越後の船が陸奥湾を行き來する際の目印に使われていました。また、松前藩主が参勤交代の折に松の下で休んだともいいます。明治37年(1904)、日露戦争開戦に際し、在郷軍人68人がここで決起集会を開き、のちに戦没者の墓地を作りました。



蓬田大館(蓬田遺跡) 25

この遺跡は、10世紀後半～11世紀代に営まれた集落跡です。標高165メートルの高地にあって、やや平坦な丘陵上に多数の堅穴住居があります。遺跡の三方は急峻な崖で、残る一方は防御機能のある2本の空堀を設けており、防御性集落としての性格を持っています。遺跡北東部には、この集落に関連する製鉄遺構群があります。

正法院の円空仏(観音菩薩坐像) 25



観音菩薩であることを顕す頭の上の化仏(けぶつ)を欠いているものの、蓮台を両手で捧げる観音菩薩です。この像は、義経寺(三厩)・福昌寺(平館)・正法院(蓬田)・浄満寺(油川)・沖館神明宮(平賀)・延寿院(鮎ヶ沢)に残される円空仏と似ており、腫と白毫にさした墨は円空自身によるものだと考えられています。津軽地方の円空仏のなかでも、とりわけ穏やかな笑みを湛えています。(青森県文化財保護課のHPを参照)円空仏の拝観には事前申し込みが必要です。

昇竜の松 27

龍が天に昇る姿に似ているため、「昇龍の松」と呼ばれています。参勤交代の宿を提供したお札にと、松前藩主からこの家の先祖が盆栽を賜りました。これを庭に移植したものと伝えられています。一般の個人の庭に植えられている黒松ですが、道路脇にあって街道から眺めることが出来ます。

